
賊星《ナガレボシ》

吾妻栄子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ナガレボシ
賊星

【年代】

2028年

【作者】

吾妻栄子

【あらすじ】

タイトルは中国語の俗語で「流れ星」の意味です。

華やかだった1930年代の上海を舞台に、
行商をする貧しい母子の悲劇を描きます。

*他サイトでも発表した作品です。

柄杓星くひじゅくぼ

「ぬひやん、見て！」

少年は大きな目をパッと輝かせると、煤けた小さな手で北の空を指差した。

「流れ星だよ！」

白い八重歯を覗かせた、浅黒い顔いつぱいに笑いが広がる。今年七つになるこの子の本名は「宏生」ホンシヨンだが、浅黒い顔といい、吊り上がった大きな目といい、八重歯といい、子ガラスそっくりな風貌をしているため、知る人からは専ら「鴉児」ヤールと呼ばれている。

「どう？」

母親は安パークの緩んだ、しかし豊かで艶のある黒髪を揺らすと、幼い息子の示す方角を窺つた。

「ああ、もう消えちゃった。」

鴉児は舌打ちする。

「どうして、すぐ消えちゃうのかな？」

母親は腕に提げた花籠を持ち直すと、白玉じみた蒼白い顔にふっと微笑を浮かべた。

「^{ホンショウ}宏生、それは、お星様だからよ。」

母親だけは、少年を本当の名で呼ぶ。

《柄杓星くひしゃくぼし》

「消えないお星様だつてこいつはあるか？」

鴉児は小さな口を尖らせた。

「あの柄杓星はこつだつて北の空に見える」

言ひながら、鴉児は諦めきれずに北斗七星に目を凝らす。さつき見た星は、あの柄杓の、ちょうど柄の真ん中を切るまつじで流れただ。

「すぐ消えるから、流れ星なのよ」

諦めなさい、とこう風に母親はひつそりした声で告げると、少年の手を引いた。

母親の手から伝わる温みに、鴉児は自分の指先が冷え切っていたことに気がつく。

「今日は寒いから、早くご飯買って帰つましょうね」

「うそ」

鴉児は母親の手を握り返して、くへりと頷いた。

本当は、今日「は」じやなくて、今日「も」寒いんだ。
多分、明日も、明後日も…。

「早くあつたかくなるといいね。」

口に出すと、余計に暖かい日が遠くなる気がして少年は微かに身を震わせる。

「すぐに、春になるわ。」

信じなさい、と言い聞かせる声で母親は答えると、小さな手を握る力を強めた。

早く春が来るよう流れ星にお願いしたい気持ちで、鴉児はまた北斗七星を見上げる。

それは、まるで北の空に浮かぶ、氷で出来た巨大な柄杓の様に映つた。

もしかすると、夜にいつも見える星は凍つていて、流れ星はあつたかいお湯で出来ているから、すぐ空の上を流れていって見えなくなってしまうのかもしれない。

夜市へよう

「粽子を六個」
ちまき

屋台の喧騒の中から、すぐ前に立つ母親の声が鴉児の耳を捉える。

やつぱり、今田も六個だ。

鴉児は肩を落として、手に持った花籠を見やる。

萎びて本来の緋色から黒っぽく変色した薔薇が、籠の半分以上を埋めている。

まだ生乾きの薔薇の、むせ返る様な芳香が

少年の鼻先よりやや上にぶら下げる母親の花籠からも漂つてくる。

母ちゃんの籠にも花がいっぱい売れ残ってるんだ。

どれだけ余っているのか、鴉児は背伸びして覗く気にもなれなかつた。

籠の八割以上花が売れた日は十個、六割ぐらい捌けた日は八個、そうでない日は六個だけ母ちゃんはいつも夕飯に粽子を買つ。

いつも花を売りに行く公園の木が葉を落とし、散歩する人が少なくなつてからといもの、ずっと晩飯は六個の日が続いている。

「行くわよ」

人混みの中、母親に手を引かれながら、鴉児は腹を擦つて空を見上げた。

今度、流れ星を見たら、毎晩粽子が十個買える様にお願いしよう。

夜市くよーひ

「はい、焼餅シャオビン、焼餅、焼き立てアツアツの焼餅はいかが?」

売り子の声と共に、温かで香ばしい匂いが鼻孔を衝く。

やつぱり、焼餅もお願いしよう。

鴉児は思い直す。

母ちゃんは、粽子チヂミの方が腹持ちするからと言つけれど、
おれはこんがり焼けた餅の方が、本当はずつと好きなんだ。

「蜜たつぷりの山査子サンザシだよー!」

流れてきた甘酸っぱい香りに、今度は涎が出る。

山査子もいいな。

九月の重陽節ちゅうようせつの頃、母ちゃんとお祭りの屋台やたいで一本買つて、
半分にして食べたきりだ。

食べて噛みしめたあの味は、匂いよりもずっと甘くて、そのくせ酸
っぱくて…。

あの時、夢中で串にむしゃぶついたせいで、最後の一 個はドブに
落としちゃった。

母ちゃんがやめないと泣きたくな顔で言つから、拾わなかつたけど…。

「親父、ハイシヨンジヤ 海鮮炒麺を一一つー。」

飛び込んできた威勢の良い頼み声に胸が騒ぐ。

炒麺つて、食べたことないや。

いつも、この市場に来るたびに、よその人がチュルチュルおいしそうに
麺を啜るとこりるを遠くから見るだけ…。

夜市くよいち

「氣取つた餐厅なんかより、こここの屋台の方がずっとうまいよな」

喧騒からまた誰かの声が届く。

せつかく、流れ星にお願いするなら、普段食べられない「駆走」の方がいいかも。

鴉児はまた思い直す。

上海蟹、北京ダック、鱻鰭のスープに燕の巣…

次々「駆走」の名は浮かんでくるが、どれも名前を耳にしただけで、どんな食べ物なのは見当もつかない。

「今日は三回くらい洋車ヤンチャにぶつけられそうになつてヒヤヒヤしたぜ」「あんなもんに轢かれたらペシャンコだ」「洋人の奴らは気違ひみたいに飛ばすからな」

屋台の客たちの声がまた鴉児の耳を通り過ぎる。

どうせなら、中国だけじゃなくて、洋人の「駆走」も食べてみたいかな。

しかし、そうなると今度は名前が浮かんでこなかつた。

強いて思い浮かぶとすれば、

いつも大通りで花を売り歩く時に洋菓子屋の前を通ると流れてくる

ふんわりした甘い匂い。

それから、真夏に公園を散歩していた洋人たちがよくおいしそうに舐めていた、不思議な溶けるお菓子。

珈琲^{コーヒー}つて凄く苦いらしいけど、お茶とどう違つかな？

頭の中で次々食べ物を追加しながら、

鳩児は色とりどりの灯りが点る市場の路上から夜空を見上げて目を

皿にした。

汚泥

パチャーン！

「あー！」

爪先のヒヤリとした感覚にしまったと思つ。

「ここのガキー！」

水溜まりに突っ込んだ右足のヒヤリがヌルヌルに変わる前に、怒鳴り声が前から飛んできた。

「すみません。子供がボンヤリしていて……」

鴉児が口を開くより先に、母親がズボンの裾を泥で汚した相手にせかせかと頭を下げる。

「ここのチビ、泥の印を付けて歩いてやがるー！」

相手は母親の言葉を遮ると、鴉児に怒鳴り声を浴びせかけた。

「おじさん、こめんなさい！」

鴉児も小さな頭を深々と下げる。

空ばかり見ていて、全然足許に気が回らなかつた。

「おじさん、だと？」

甲高い怒鳴り声からくぐもった唸り声に転じた相手を、鴉児は改めて見上げる。

全く男前でもなければ品のかけらもないが、年だけは若いと分かる男が、誇りを傷付けられた顔つきで一いちらを見下ろしていた。

「あ、おこにさん、ごめんなさい」

もつとまことになってきた。

水溜りから取り出せない右足がどんどん泥水に漫食され、凍りつく様な感覚が鴉児の爪先から背中を這い上っていく。

「 ！」のチビ、田ん玉をくつぬいてやるー。」

爪の先尖った、大きな手が上から伸びてきたかと思つと、母親の蒼白い手の甲が少年の眼前に立ちはだかる。

「 お願いです、子供のことですから…」

「 うるせえ、邪魔なんだよ」

若い男が母親の手首を掴んだところで、不意に、その後ろから上等な外套を着た中年の小太りの男が出てきた。

「 もう、よさないか」

「 どうやら若い男は一人歩きではなく、周囲にゾロゾロいる険しい田つきの男たちと連れ立つて行動しているらしい。

無言で自分と母親を見下ろしている幾つもの顔から、鴉児は今更の様に気が付いた。

「 こんな所で、女子供相手にみつともないぞ」

年恰好や服装からして男たちの頭田らしい、外套の中年男が若い男をたしなめる。

助かった。

鴉児が息を吐いて母親を窺うと、平素も白い母親の顔は更に血の氣

を失つて

紙の様になつており、繋いだ手を痛いほど強く握られた。

「何だ、阿茉^{アモー}じゃないか」

外套の中年男が急に目を丸くする。

そのギョロリとした目が、母親の豊かな黒髪、化粧氣のない蒼白い顔、

洗い晒して色も生地もすっかり薄くなつた服に包まれた胸、ほつそりした足に履いた破れ靴をなぞつて、隣の鴉児まで捕えた。

「こんな所で遭うとはな」

中年男の赤黒い顔ににんまりとした笑いが広がつた。

「やつぱり上海は狭いぜ」「雲哥のお知り合いでですか？」

ズボンを汚した若い男が打つて変わつて笑顔になり、母親から離した手をさつと後ろに回す。

このおにこちゃん、急に声まで変わつたぞ。

こういう変わり身を目の当たりにするのは初めてではなかつたが、鴉児はやはり嫌な気がした。

「古い顔馴染みさ」

「なんすかあ」

「えらい別嬪さんですね」

「当たり前だろ」

男たちの会話をよそに、母親は俯いたまま何も言わない。

「花を売ってるのかい？」

外套の男は、母子が提げた籠と俯いている母親の胸元を交互に推し量る様に眺めながら尋ねた。

「やうだよ」

母親に代わって鴉児は答える。

こいつもやつぱり、嫌なやつだ。

母ちゃんをジロジロ眺めて、何だか面白がる顔つきをしていく。

普段、花を売る客の中にも、母親を眺め回す男は少なくない。

しかし、この外套の男の視線には、

そうした通りすがりの人間よりもっと露骨で執拗な何かが感じられた。

「この寒いのにかい？」

外套の男は今度は母親の細く長い脚から不恰好な古い靴の爪先にまで目を注ぐと、口の端で笑う。そつすると、口ひげの下から、黄色い乱杭歯がのぞいた。

「寒い時に花を売っちゃ悪いのかい」

鴉児が何とか男と目を合わせようと顎を突き出すと、母親と繋いだ手が更に強く握り締められる。

やめなさい、と暗黙に言っている様だ。

「あいつそれくりだな」

外套の男は一重になつた顎で鴉児を指すと、いかにも可笑しそうに笑つた。

ズボンを汚した男や他の仲間らしい連中も一やつしている。

「親父も雪の日に夏物一枚と水一杯で晩まで働く奴だったしな」

汚泥

「阿雲」
アウン

母親が俯いたまま低い声で呟く。

「まだ私たちをバカにしたいの」

「そんなんじゃないわ、阿茉」
アモー

外套の男は、今度は妙に粘り氣のある声で母親の名を呼んだ。

「お前は誤解してるとみたが、俺と阿耀は同郷の仲間だったんだ
ぜ」

「こいつ、父ちゃんと同じ合いでいるのか。」

男がしたり顔で父親の名を口にするのを耳にして、鴉児は、唾を吐きたくなるのを堪えた。

まるで、匪賊の頭みたいなやつじゃないか。

「一緒に郷里から出て、最初は同じ店で丁稚でつちしたしな。
振り出しあは一人とも同じだった」

周囲の子分たちにも聽かせる様に言つと、男は今度は鴉児に顔を向けた。

「お父さんの棺桶代くわんとうだいだって、おじさんが出してあげたんだよ」

撫で擦る様な口調とは裏腹に、ゾシとするせじ冷たい皿がこじりを見下りしていた。

「その時はお母さんのお腹の中にいたから、君は知らないだらうね」「どね」

母親が無言で歩き出したので、手を繋いだ鴉児も引っ張られる形で歩き出す。

外套の男も手下らしい連中も、思いの外あつたり道を空けた。

「こつでも相談に来いよ、別嬪さん！」

鴉児が振り返ると、外套の男はまた最初の面白がる顔つきになっていた。

「あの界限はもう引き払つたけど、俺に逢いたきや、夜は大体、『ダスカ大世界』の賭場にいるぜ」

鴉児と皿を合わせて増えしげな笑いを浮かべると、男は再び顎をしゃぐる動作をした。

「花売りだけじゃ、坊やの靴も揃わないだらうからなー。」

「の次、流れ星を見つけたら

「母ちゃん」

裏通りに出ると急に辺りは静かで真っ暗になつた。

「泣いてるの?..?

「ううん」

黒い影になつた母親は鼻に手を当てて首を横に振る。

「何でもないの」

鼻を啜り上げる音が辺りに響いた。

やつぱり、母ちゃん、泣いてるんだ。

鴉児は濡れた右足が次第にかじかむのを覚えながら、左足で道端の石を蹴つた。

蹴つた小石は、カツカツと乾いた音を立てながら路地の遠く、どこか確かめられない場所に幽かな音を立ててぶつかつた。

悪い奴らが、母ちゃんを泣かせた。

鴉児は歯を食いしばって夜空を探る。

この次、流れ星を見たら、早く大きくなつて悪い奴らを倒せる様にお願いしよう。

おれはもう七つなのに、いつも三二つか四つと間違えられる。
だから、お星様にお願いして、大人の洋人くらいの体にしてもらひ
んだ。

見上げる空は雲が立ち込めてたらしく、星一つ見出せなかつた。

「今夜は雪にならうね」

母親がぽつりと独り言の様に言つた。

「の次、流れ星を見つけたら

「それじゃ、母ちゃんは出掛けてくるからね

どこの仕舞っていたのか、母親はいつも夜着る黄緑の旗袍チヤイナドレスより
もっと派手な緋色の旗袍に、普段より更に濃い赤の口紅を引いていた。

「うん」

毛羽立つてあけこむ擦り切れた毛布にぐるまつたまま、鴉児は壁を
向いたまま答える。

誰にも言つたことないけど、絶対誰にも言えないけど、
おれは、化粧した夜の母ちゃんの顔は嫌いだ…。

母ちゃんじやなくて、どいかよその女人みたいで怖い。

「宏生、朝までいい子で寝てるのよ」

「うん」

染みの広がった壁に向かって頷く。

バタンと扉の閉まる音がしてから、初めて鴉児は母親の去った方を
向く。

毎晩、あの扉の閉まる音を聞くたびに、
母ちゃんがこれっきり一度と帰つてこない気がして怖くなる。

灯りを消した部屋の中で眺めると、白い壁に点々と生じた染みは、浮かび上がった幾つもの人の顔の様で、黒い扉はまるで見る者を吸い込む四角い穴の様に見える。

鳩児は思わず身震いすると、冷気の流れ込んでくる毛布の穴を握り締め、寝転がつたまま膝を抱えて両を開いた。

この次流れ星を見つけたら、母ちゃんが毎晩化粧して外に出ていかないようにも、絶対お願ひしなくてはいけない。

「ぬひやんー」「

東の空にようやく光がさした頃、大通りは一面に白に雪に覆い尽くされていた。

「どー行つたんだよ、うー。」

薄暗く人影一つ見当たらぬ通りに、幼い声が響く。

「お花売りに行く時間だよ、うー。」

本当は、いつもなら、化粧を落とした母親がお湯を沸かして、買ってきた朝食の粽子の包みをテーブルで開いているぐらいの時刻だと鴉児は知つてゐる。

だが、そんなことはどうでも良かつた。

「早くしないと間に合わないようー。」

まだ爪先が湿つたままのボロ靴で雪の上を急いで駆け出すると、鴉児は凍り付いた路面につるりと転んだ。

「もう朝なんだから……。」

それに、おれは朝までいい子で寝てたんだから。

柔らかな雪は、まるで綿の様に転んだ痛みを和らげたが、

握り締めた拳の中で、瞬く間に冷たい水に溶けて零れ落ちる。

「あつー。」

転んだまま空を見上げた鴉児は思わず息を飲んだ。

藍色が薄まつて水色に転じていく西の空を、真っ白な星が尾を引きながら、緩やかに流れ落ちていいく。

流れ星だ。

やつとり、もう一度出て来てくれた。

鴉児は雪の上に膝を着くと、赤くなつた小さな手を口わせて震えながら祈つた。

「お星様」

少年の大きな黒い目に光るもののが点じて揺れた。

「どうか、母ちやんに会わせて下さー。」

瞬き一つしない両目から、涙が溢れて零れ落ちた。

「(う)馳走も何もいらないから、ずっとボロを着たチビのままでもかまわないから、

今すぐ、おれを母ちやんに会わせて下さー。」

星は、光りながら、空と地上のあわいに紛れて消えた。

鴉児は立ち上がると、膝の雪を払つのも忘れてまた歩き出した。

足は自然といつも花売りへ行く公園に向かう。

きつと、母ちゃんは先に花売りに行つたんだ。

頭の中で、そう弦く声がした。

公園に近づくにつれて、踏みしめる雪は次第に柔らかさを失い、足の下で軋んだ音を立てる。

だが、鴉児にはむしろ快かつた。

おれ以外の足音が聞こえたら、それが母ちゃんだ。

公園に辿り着くと、一晩空けてすっかり様変わりしていた。

昨日までは葉の殺げた枯れ木そのものだつた植木が、一斉に雪の花を枝に咲かせている。

人にはたとえれば、まるで食はあさんから着飾つた若い綺麗な女に化けた様な変身振りだ。

これなら寒くても公園に来る人がいっぱいいるだ。

今日なら、花がいっぱい売れる！

鴉児は思わず雪の上で飛び跳ねた。

すると、バサリと背後で何かが落ちる音がして、鋭い叫びが耳に入つた。

鴉児が振り向くと、背後の木の根元に雪の小山が出来ていて、水色の影が白い雪道の上を流れて去つていった。

どうやら、自分が飛び跳ねた拍子に、木の枝の雪が落ちて、木の上に止まっていた鳥鴉カラスが逃げたらしい。

「びつくりした」

鳥鴉カラスの鳴き声は時々人の悲鳴みたく聞こえるのだ。

しきりに頭の上を飛んでいく鳥鴉の鳴き声に胸をざわつかせながら、鴉児はまた舗道を歩き出した。

雪を積もらせた木々の間は、普段の枯れ木の時より冷たい風を通さない代わりに暗い。

「雪を踏みしめる」とつよい、「一歩前に踏み出すたびに、一瞬の間を置いて足が雪に沈む」状況になってきた。

靴の中に入り込む雪が段々、冷え切った小石に思えてくる。

母ちゃんはやつぱりここじゃなくて、入れ違いで大通りの方に売りに行つたのかもしれない。

そつ思つた瞬間、行く手に何かが半ば雪に埋もれて落ちているのが鴉児の目に入った。

「あー」

雪に足を取られながらもがく様に進んでいくて、小さな手で雪を搔き分ける。

「これ……」

白い雪に埋もれていたのは、果たして母親が夜に履く踵の高い靴だつた。

拾い上げて、まるでそれ自体が靴の一部になつた様に固くじびり付いた雪を削ぎ落とす。

露わになつた細い踵の部分は、靴本体から半ば取れかかっていて、指先でちょっと突いただけでもグラグラ揺れた。

「うわちだ！」

鳩児は赤くなつた手に片方だけの靴を抱くと、夢中で駆け出した。

母ちゃんは間違いなくこの先にいる！

「母ちゃんーー！」

幼い声が響き渡ると、雪道にたむろしていた黒い鳥の群れが一斉に飛び立つた。（ア）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0028z/>

賊星《ナガレボシ》

2011年11月30日14時52分発行